みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

世界のチャイナタウンからみた人びとと文化の移動

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 天璽 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4508

世界のチャイナタウンからみた人びとと文化の移動

陳　天　璽

1　はじめに

ただいまご紹介にあずかりました陳天璽と申します。

現在、国立民族学博物館に所属しており、移民研究、とくに華僑華人研究や無国籍の人々の研究に従事しております。華僑華人研究をしているため、海外へ旅に出た際は必ずといっていいほどチャイナタウンを訪れています。ちなみに私は横浜中華街（チャイナタウン）生まれ、中華街育ちです。今日は、「世界のチャイナタウンから見た人びとと文化の移動」というタイトルでお話をさせていただきますが、本日は講座の第一回目ということですので、クイズ形式で皆様と一緒に考え、写真を見ながら、チャイナタウンについて理解を深めていきたいと思っております。

また、本講座の共通テーマは「東アジアの民衆文化と祝祭空間」ですので、のちほど横浜チャイナタウ

ンに新しく生まれたお祭りである「媽祖祭」をご紹介させていただきます。また、最近は韓国のインチョン（仁川）・チャイナタウンの調査もしているので、韓国でのチャイナタウンの動きや、そしてインチョン・チャイナタウンに新しくできたお祭りについてもお話ししたいと思っています。華僑華人の越境にともない、世界各地のチャイナタウンではさまざまな形で人と文化が交錯し、ユニークな現象が起きています。そんなチャイナタウンのダイナミズムを一緒にみていきましょう。

2　移民に伴う文化の越境

まずはじめに、チャイナタウンの主役である華僑華人は、移民の一大グループとして知られています。移民という言葉を考えてみると、その定義は国際的に共通したものはなく、きわめてあいまいです。移民の人々を調査、サポートする国際移住機関（ＩＯＭ）は、移民を「生まれた国とは違う国で長期（一二カ月以上）暮らしている人」と定義しております。この定義に合わせた場合、現在世界には、どれくらいの移民がいると思いますか？

ＩＯＭが発表した二〇〇五年の統計によると、出生地を離れ、他の国で生活している移民は、一億九千万人を超えるそうです。地球の人口が六五億人である今日、単純計算すれば約三四人に一人が移民ということになります。これは、主に一世の人たちの数です。例えば、移民の親（一世）から生まれた二世、三世は、通常、家で親の母国の言葉や文化に触れ、一方、学校や社会では居住国の文化や言語に触れています。そうした移民の子孫にまで考えを及ばせると、複数の言葉や文化に日常的に触れている人の数は非常

に高い割合であることがわかります。

誰にでも簡単に想像できることですが、移民など人の移動に伴って、文化も伝播されていきます。本日のテーマであるチャイナタウンは、そのもっともわかりやすい例です。華僑華人たちは、中国を離れ各地に移住し、チャイナタウンを形成しました。世界各地のチャイナタウンでは、中華料理が食され中国物産が売られているだけではありません。そこに移住した華僑華人たちが営む日常のなかで、春節や中秋など中国の暦に沿った時間が流れています。チャイナタウンという空間で行われる祭りは世界各地に中国の民衆文化を伝播しているのです。

私たちは自分が移動しなくても、移民の人たちが自分の国に移住してくることで、彼らが身につけている文化に触れることができます。そういった角度から見ればチャイナタウンはおいしい中華料理が食べられる街だけでなく、身近に異文化が体感できる空間であることに気付かされます。

3　中国系移民の呼び方と国籍

中国系移民、つまり中国の領土以外に住んでいる人たちを華僑や華人と呼びますが、「華僑」と「華人」の違いは具体的に何だと思いますか？　世代の違いでしょうか？　生まれたところでしょうか？　それとも国籍でしょうか？

華僑の「僑」という字には「仮住まい」という意味があります。外国に居住している中国系の人ですでに居住国の国籍もしくは中国以外の国籍を持っている人たちを「華人」と呼びます。一方、中国の国籍を

持ち続けている人は、外国に仮住まいしていると考え「華僑」と呼んでいます。日本では、華人よりも華僑という呼び方が定着していましたが、それは、日本の国籍を取得することが難しかったため、長年日本に居住しても華僑であり続けた中国系移民が多かったからだと思います。しかも、日本の国籍法は血統主義を基本としているため、華僑から生まれた二世の国籍は中国となり、華僑であり続けました。一方、アメリカやカナダなどの国籍法は出生地主義を基本としているため、現地で生まれた二世はアメリカ国籍、カナダ国籍になります。彼らは、「アメリカの華人」とか「中国系アメリカ人」と呼ばれています。近年になり、日本でもようやく日本国籍を取得した華人が増え、華僑という呼称だけではなく、華人や中国系という言葉が使われるようになっています。

4　世界の華僑華人とチャイナタウン

では、華僑華人と呼ばれる中国系の移民は、世界にどれくらいいると思いますか？　一億人でしょうか？　三〇〇万人でしょうか？　一千万人ほどでしょうか？

華僑華人の人口統計をとることは、きわめて難しいです。正直、正確な人数はわかりません。しかし、台湾の僑務委員会の統計や先行研究によれば、華僑華人は世界に三千万人ほどいると見られています。移民のなかでも大きなグループです。それは、世界中どこに行っても大なり小なりチャイナタウンがあり、華僑華人に出会うことからも実感することができます。移住先にチャイナタウンを形成し、そこを基盤に生活している華僑華人たちがたくさんいます。

次の写真1をごらんください。これはどこだと思いますか？　通りの中心に立つゲートを中国語で牌楼（パイロー）と呼びます。牌楼はチャイナタウンのシンボルとなっています。牌楼が目印となり、そのあたりがチャイナタウンであることが一目でわかるようになっています。この牌楼に刻まれている字を見て、中国の海南島と思われる方が多いのですが、これは中国国内ではありません。よく見ると、門の中心部にはマレー語が書かれています。実は、ここはボルネオ島マレーシア領のクチンという街です。中国系移民は、マレーシアの全人口の三割を占めており、経済的にも政治的にも、そして文化的にも大きな存在感を持っています。クチンにあるこのコミュニティは旧市街の中心部に位置しています。福建や海南の出身者が多い地域です。こうした門のほか、信仰、食文化など彼らは故郷の

写真1　マレーシア・クチンのチャイナタウン（筆者撮影・以下同）

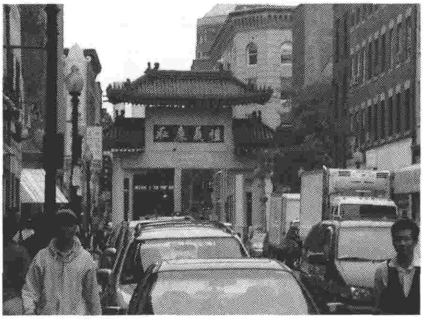

写真2　アメリカ・ボストンのチャイナタウン

写真3　ニューヨーク、ブルックリンのコミュニティ

慣習を色濃く残しています。

こちらは私が住んでいたボストンのチャイナタウンです（写真2）。ニューヨークやサンフランシスコのチャイナタウンと並んで早い時期から栄えてきたチャイナタウンの一つです。ボストンのチャイナタウンは鉄道や港、そして地下鉄などに隣接しており、交通網の中心部にあります。ボストンのチャイナタウンでは中華料理店だけではなく、マレーシア料理店、ベトナム料理店などもあります。マレーシアやベトナムに居住していた華僑華人たちが、アメリカに再移民し、こうしたお店を経営しています。彼らはベトナム華人、マレーシア華人が好んで食べるようなメニューを提供しています。華僑華人の移動・移住に伴って、食文化も多様化しているのがわかります。

こちらはニューヨークのコミュニティ（写真3）です。ニューヨークのチャイナタウンは観光スポットとしても有名で、必ずガイドブックに載っています。ガイドブックに載っているのはマンハッタンにあるもっとも歴史の古いチャイナタウンです。ニューヨークの華僑華人の暮らしや行動範囲を観察していると、コミュニティが拡大していることがわかります。私たちが知るマンハッタンのチャイナタウン以外にフラッシング、ブルックリン、そしてブロンクスなどに中国系のコミュニティができています。これらの場所をつなぐ乗り合いバスがあり、その中で出会ったニューヨークに移住して三〇年になるという華人女性は、

「ニューヨークには四つもチャイナタウンがあるのよ」と話していました。新しくできたチャイナタウンには一般の人たちがチャイナタウンといったときにイメージする牌楼のようなゲートや中国風の建築物やモニュメントはみられません。しかし、看板などから新しく移住してきた中国系の人たちの生活空間として機能しているのがわかります。写真に映っているビルの看板に「華業地産」と書いてありますが、不動産屋です。華僑華人は、地元で不動産業をやるだけの資金やネットワークを有していること、また、中国系移民の移住が激しく、不動産業のニーズが高いことが見てとれます。

人の移動と文化の交錯によって生まれるユニークな現象について、少しお話をさせていただければと思います。ニューヨークのチャイナタウンを歩いていると「優の良品」と書いてある看板をよくみかけます。考えてみれば、かつて香港でも類似した店を見た記憶があると思い足を止めてみました。

お店では「AJI ICHIBAN」と印刷された各種お菓子が売られていました。「の」というひらがなを漢字と混ぜて表記することで日本製、もしくは日本風のものであるというディスプレイをしているのが特徴的です。

こういった日本風のものを売っているお店の多くは、香港や台湾を経由してアメリカに移住した華僑華人たちが経営しています。一九八〇年代ごろ、香港や台湾では、日本ブームが沸き起こりました。そのころ、香港や台湾では、しばしば漢字とひらがなを合わせた名称をつけた商品が売られるようになりました。彼らの間では、日本製品は高級で良質なものというイメージがあります。ニューヨークにも、香港や台湾から渡った華僑華人たちが多く暮していますが、こうした「日本製品まがい」のものは、彼らがチャイナタウンに持ち込んだものであると考えられます。写真4をご覧ください。

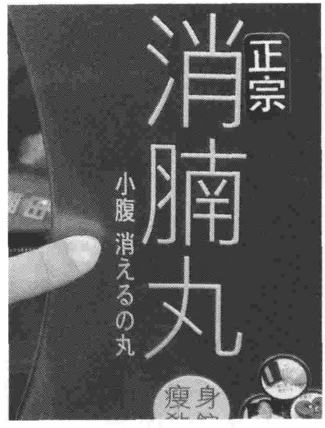

写真4　ニューヨーク・フラッシングのチャイナタウンで売られていたダイエット食品

ダイエット食品ですが、主な消費者は現地に住む華僑華人です。というのも、商品にひらがなが使われていますが、これが一体何であるのか理解できるのは中国語ができる華僑華人だけだからです。この「消腩丸」の左横に小文字で「小腹消えるの丸」と少しおかしな日本語が印刷されていますが、日本語の分からない製造者が、日本語の分からない消費者向けに、日本製であるかのようにみせかけているのがわかります。アメリカで売られているにもかかわらず英語表記はありません。ちなみに、右上のほうにシールで「正宗（ツェンツオン）」と付け加えられています。これは中国語で「本物」という意味です。何を指して本物と言っているのかは不明です。本物の日本製品であると強調したかったのであれば、むしろシールは逆効果なのではないかと個人的には思います。

いずれにせよ、こうした小さな商品一つをとっても、人の移動に伴うさまざまな文化の融合が、興味深い形で起こっているのがおわかりいただけるでしょう。チャイナタウンはその宝庫です。

写真5はオランダのアムステルダムのチャイナタウンの一角です。華僑華人の間でも信者の多い仏光山（台湾南部）の寺院です。アムステルダムのチャイナタウンは、「飾り窓」で知られる有名な歓楽街のすぐ隣にあります。あまり広くないチャイナタウンの中心部に、この寺院は建てられており、ひときわ目立っていました。華僑華人の移住に伴い、中国の仏教がオランダに流入し、根付いていることがわかります。

次の写真6はどこでしょう？　会場から「横浜」という声が聞こえました。確かに横浜の牌楼に似ていますね。しかし、写真をよく見ていただくとハングル文字で書かれた看板があるのがわかります。実は、これは韓国のインチョン（仁川）・チャイナタウンです。華僑華人の研究をしている方ならご存じだと思いますが、韓国はこれまで、「チャイナタウンのない国」と特徴づけられてきました。そんな韓国のインチョンに近年立派な牌楼ができ、観光地としてチャイナタウンの復興が進んでいます。

写真5　オランダ・アムステルダムの中国仏教寺院

写真6　韓国・インチョンのチャイナタウン

最近、インチョン・チャイナタウンの調査をしており、何度か訪れていますが、インチョンのチャイナタウンは、数年前まで今のような面影はなかったそうです。現在のチャイナタウン辺りには、かつて華僑華人が集住しており大きなコミュニティがありました。この一角に華僑学校があること

写真７　横浜中華街

からその様子がうかがえます。しかし一九六〇年代に行われた韓国政府の厳しい外国人政策により、多くの華僑が韓国を離れたそうです。それに伴いチャイナタウンの面影は薄れていきました。一度廃れてしまった街にインチョン市政府が資金を投入してチャイナタウンを立て直し、観光地化や海外投資の誘致に役立てようとしています。こうした動きのきっかけになったのは、一九九〇年代半ばにあった韓国の経済危機でした。経済の立て直しのため、ＩＭＦ（国際通貨基金）から、韓国は中国など近隣諸国からの投資や移民をもっと受け入れたほうがよいとのアドバイスがあったそうです。その一プロジェクトとしてインチョン・チャイナタウンの再建が進められました。かつて街を離れた華僑華人たちのなかには、再建に伴い再びインチョンに戻りビジネスを始めている人もいます。チャイナタウン再建プロジェクトに伴って、市の職員や関係者が横浜をはじめ近隣諸国のチャイナタウンを視察したそうです。牌楼のイメージが横浜と似ているのは、そういった関係もあるのかもしれませんね。

写真７はお馴染みの横浜中華街です。日本は長崎、神戸、横浜など港街として栄えたところに古くからチャイナタウンがあります。幕末の開港と深いゆかりがあります。今年二〇〇九年はちょうど開港一五〇周年にあたります。開港に伴い、日本に多様な文化が流入したことは知られていますね。

5　観光地化する日本のチャイナタウン

日本のチャイナタウンの特徴に、観光地化が進んでいることがあげられます。特に横浜中華街の場合、ディズニーランドと並び、年に二千万人の観光客が訪れるほど一大人気スポットとなっています。

私は横浜以外に、ボストンやニューヨーク、ローマなどに住み、チャイナタウンを調査しましたが、日本以外にあるチャイナタウンはエスニック・コミュニティとしての機能が強いです。例えばローマの場合はローマに住んでいる華僑華人（温州出身者が多い）のための街であり、ニューヨークのチャイナタウンも観光スポットとして有名であるとはいえ、やはりニューヨークに住んでいる華僑華人のための街として機能しています。一方、日本のチャイナタウンは、エスニック・コミュニティというよりも観光地としての機能が年々強くなっているように思います。それは、街の消費者の九五％が地元の華僑華人ではなく、街を訪れた日本人観光客であるという特徴からもうかがえます。

日本の消費者の多くはチャイナタウンに対して「中華料理のテーマパーク」というイメージを持っています。中華料理がよくマスコミで取り上げられますし、街には中華料理店が林立しているのがその要因であると思われます。さて、横浜中華街には、どれぐらい中華料理店があると思いますか？

横浜港から少し入った一角に、五〇〇メートル四方のエリアを東西南北の牌楼が囲みその一帯を「中華街」と呼んでいます。商業地域として発展し、六〇〇軒ぐらいのお店が軒を連ねています。そのうち中華料理店は二五〇軒ほどだといわれています。当然ですが、中華料理店以外に肉屋さん、八百屋さん、薬屋、

クリーニング店、コンビニなど、地元で生活する人々に必要なものを売っている商店もあります。

かつては、街の住民の半数を占める日本人の方が肉屋さん、魚屋さん、八百屋さん、食器屋さん、電気屋さんなどを経営し、華僑華人がレストランや中国物産店を経営するといった形で、はっきり分業が行われていました。ここ二〇数年の間、チャイナタウンの観光地化が進むにつれ、肉屋さんをしていた日本人経営者が中華の肉まん屋に衣替えをし、魚屋さんをしていた方が中華の海鮮料理店になり、また電気屋さんが中華風の小物を売る土産店に経営転換するという現象が多く見られます。街に住む日本人の方たちが、チャイナタウンの観光地化に伴い、中華文化をテーマとしたビジネスに転換しているのはとても興味深い現象です。

また、マーボ豆腐、スブタ、チャーハンなど、日本の皆さんにはなじみの深い中華料理は、実は地方によってさまざまな特徴があります。チャイナタウンでも、お店やチーフの出身地によって得意とする料理が違います。餃子や麺類は北方、チャーハンなどのご飯類は福建など南方出身者が得意です。広い中国の地方風土に合わせさまざまな料理があります。移住してきた華僑華人がどこ出身なのかによっても、持ち込まれる中華料理は違ってきます。たとえば、韓国ではジャージャー麺が広く親しまれていますが、それは韓国華僑の多くが山東省出身であるからです。一方、日本ではチャーシュー麺やチャーハンが親しまれてきたのは、広東や福建など南方出身者が多かったからでしょう。

しかし、移民の出身地だけではなく、移住した先の風土や文化、消費者の嗜好によって料理も変化します。最近の日本のチャイナタウンで特徴的なのはセットメニューが増えていることです。例えば、一つのセットに、料理、麺、チャーハン、点心など、いろいろなものが少しずつ入っているというスタイルのメ

ニューです。しかも、お客さん一人ずつにお膳を使って出す中華料理店も増えています。いろいろなものを少しずつというのが、とても日本的だと思いませんか。このほかにも、食べ放題のお店が増えております。そして回転寿司ならぬ回転飲茶の店もあります。どれも、消費者である日本人にあわせ、食文化が変容している表れです。

6　横浜中華街形成の歴史的背景

横浜中華街には、広東料理のお店が多いのですが、なぜだと思いますか？「食は広州にあり」といって、もっとも美味しいからでしょうか？　それとも、甘味やとろみを特徴とする広東料理が日本人の口に合うからでしょうか？

答えは、横浜に移住した古い華僑は広東の方が多かったからです。日米通商条約が締結され一八四九年に横浜が開港したとき、アメリカ、イギリス、フランスなど欧米諸国の人びとがやってきました。そのとき、中国系の「買弁（ばいべん）」が欧米人に付随して日本に来ました。買弁は、日本人と欧米人の仲介役をする人です。なぜ仲介役が必要だったかというと、欧米人と日本人は直接コミュニケーションができなかったのです。一方、中国人と日本人は筆談で交流ができました。香港や広東など、日本よりも早くに欧米人に開港されていた地域の中国人が買弁として連れてこられたのです。その多くが広東の方でした。このほか、横浜の場合は船の航路の関係で、上海のほか香港や広東一帯から来る方が多かったのです。

開港し外国人が日本に流入した当初、開港場付近には外国人居留地が設けられました。その近くに設け

られた雑居地が現在の横浜中華街の前身です。当時、外国人は、日本人が生活する内地に自由に行くことは制限されていました。欧米人がそれに強く反対し外国人居留地の撤廃を求めました。その結果、一八九九年に「内地雑居令」（勅令三五二）が発令されました。この勅令に伴い、日本に在住できる中国人は「三把刀（サンパータオ）」に限られました。「三把刀」と表される三種類の刀の職業とは、第一に菜刀（ツァイタオ）（包丁）を使う料理人、第二に剃刀（ティータオ）（かみそり）を使う床屋、第三は剪刀（チェンタオ）（はさみ）を使う洋服の仕立て人でした。つまり、欧米人の生活に必要な技術を持っていた中国人に限られたのです。日本人は当時、丁髷（ちょんまげ）をしていたので髪の切り方がわかりませんでした。また、和服を着ていたので洋服の作り方もわからなかったでしょう。日本人よりも早く欧米人と交流していた中国人は、そうした技術をすでに身につけていました。また、開港当初、来日した中国人の料理人が作っていたのは中華料理ではなく西洋料理でした。日本では開港に伴い、西洋人が流入して近代化が進んでいきますが、日本が近代化する際に、欧米と日本のハブ役をしていたのは実は中国人だったのです。

なぜ中華街には現在、中華料理店が多いのかというのも、華僑華人の職業を「三把刀」に制限した歴史的影響が垣間見られます。洋服をつくるのは年に一度か二度です。髪を切るのもせいぜい月に一度ぐらいでしょう。しかし、ご飯は毎日食べますね。こうした需要供給のバランスから考えて、生き残りやすい職業は自ずと決まってきます。かつて、洋服の仕立て業をしていた華僑が、世代の変遷とともに中華料理店に転業したというケースはよく見られます。現在の「中華街＝中華料理のテーマパーク」のイメージが定着する原因は、一五〇年前の開港当時からすでに種がまかれており、それが綿々とつながっているのがわかります。

7　祝祭空間としてのチャイナタウン

以下では、本講座のテーマであるお祭りに注目し、チャイナタウンをみてゆきたいと思います。現在、横浜中華街では「春節祭」や「関帝誕」、「媽祖祭」など、中国の暦と伝統にちなんだお祭りがあります。華僑華人家庭が守り続けている大切な祭事の一つに「清明節」がありますが、何をする日でしょう？

街おこしから始まった「春節祭」

まず「春節祭」を見てみましょう。中国語の「春節」は、旧暦の新年を指しますが、そのころ、中国の街では爆竹が鳴り響き、龍舞や獅子舞が演じられます。家族は団欒し、親戚などの間ではお互い新年の挨拶「拝年」をします。子供たちは赤い包みに入ったお年玉「紅包」をもらいます。そんな春節の賑わいを、チャイナタウンにも定着させようと企画されたのが「春節祭」です。「春節祭」を中国語として読んだ場合、意味はわかるのですが、正直少々不思議な感じがするというのが一般的な中国人の感想でしょう。中国語で「節」とは特別な日、祝祭の日という意味です。それにさらに「祭」が加わっているからです。

かつて日本の華僑華人たちの間では、春節といってもせいぜい家族や親戚で集まって食事をするくらいでした。しかも、日本の暦に従って生活しているサラリーマンや子どもたちが多いため、春節だからといって特別に仕事や学校を休むことはありませんでした。ましてや街をあげて春節を祝う雰囲気は見られま

せんでした。むしろ、チャイナタウンでお店を経営している人が、春節になるとお店を休みにして家族でゆっくり過ごすことが多かったように思います。

しかし、華僑華人自身があまりにも日本社会への同化が進んでしまったのを危惧したのか、もしくは、街に活気がないのを危惧したのか、一九八〇年代に入ると、チャイナタウンらしさを取り戻そうと街おこしの動きがはじまります。「春節祭」は、そこで最初に発案されたイベントでした。先ほど、「春節祭」は中国語としては少し不思議な響きであることは触れましたが、これはチャイナタウンの人たちが作った「和製中国語」であるからです。日本のチャイナタウン独特の文化ともいえるでしょう。通常、旧暦にもとづく春節は、新暦の一月末から二月ごろ、観光地にとってはちょうど閑散期にあたります。日本の人にはあまり馴染みのない春節をチャイナタウンならではの祭りにし、多くの観光客や来街者を呼び込もうとしたのです。

実際、「春節祭」が始まったのは、横浜では一九八六年、神戸では一九八七年とここ二〇年ほどのことです。「春節祭」では、チャイナタウンとゆかりのある華僑華人の若者や関係者がたくさん参加し、中国の伝統芸能である龍舞や獅子舞、そして民族舞踊が街で披露され、賑やかなパレードが行われます。寒い冬の街は一気に活気づきます。テレビや新聞などのマスコミにも取り上げられ、たくさんの日本人観光客が増えました。それに伴い、日本人の間でも春節を知る人々が増えました。チャイナタウンの街をあげての取り組みに影響され、華僑華人たちの間でも、中国の旧暦の祭事や伝統芸能を見直す動きがでてきています。

中華街のお祭りには欠かすことのできない伝統芸能の一つに、獅子舞があります。獅子舞の担い手は、

主に華僑学校の生徒と卒業生たちです。獅子舞が上手な人は、みんなの憧れの的です。世界の華僑華人たちの間では、獅子舞の演技を競う世界大会があります。シンガポールやマレーシアで行われており、横浜中華学院の卒業生率いる校友会の獅子舞は、世界のトップクラスの技術と演技力を有していると評されています。横浜中華街という身近なところでお祭りが行われる度に、私たちは、世界屈指のハイレベルな獅子舞をみることができるのです。実は、獅子舞をはじめとする中国の伝統芸能も戦後一時は廃れていましたが、チャイナタウンで春節祭や関帝誕など、お祭りが増えるのに伴い伝統芸能活動が復活し、しかも、演技のレベルが高くなっています。

和解と発展の守り神である関帝の生誕祭

次に「関帝誕」というお祭りについてお話ししたいと思います。関帝廟とは、皆さんもご存知の『三国志』に出てくる武将「関羽」を神格し祀った廟です。彼は信義を重んじたことから、多くの人に慕われました。また信用を重んじる商人の間では、商売の神様として崇拝されるようになりました。中国国内だけでなく海外に渡った華僑華人社会の間でも崇拝され、なかでも特に広東系の方たちが信仰しています。

現在、横浜の関帝廟は、すっかり観光名所となっていますが、実はここ一〇数年のことです。現在の廟の前身は、横浜中華学院のグラウンドの内側にありました。通りからはみえない学校構内にひっそりと佇んでいた廟へ参拝に来る人は、地元に住む華僑華人、しかも横浜中華学院の関係者が主でした。実は、横浜の華僑学校は政治イデオロギーの差異により、親中国派と親台湾派の二つに分かれています。関帝廟は親台湾派である中華学院の校庭の構内にあったため、親中国派の人たちは、なかなか入りづらかったので

す。一九八六年、第三代の関帝廟に火災が起き、再建を計画しているなか、所有権や運営に関し両派閥からいろいろな意見や論争がでました。一時は再建計画が頓挫しました。結局、若い世代の中道派のリーダーたちが主導し、関帝廟を街に住む華僑華人はもちろんのこと、街に来るすべての人に開かれた廟にしようと提案しました。その結果、学校の構内から通り沿いに廟を移し、より多くの人が立ち寄れる場所に現在のきらびやかな廟を再建しました。

関帝廟が再建された後、関羽の生誕日である旧暦六月二四日には、「関帝誕」という祭りが行われるようになりました。祭りの当日、午前中は神殿で拝神儀式が執り行われ、そして午後は、関帝をのせた神輿、獅子舞や龍舞など中国の伝統芸能が街中をパレードし、夜には特別会場で舞台芸能が披露され生誕を祝います。この祭りは、戦前行われていたという記録が残っていますが、第二次世界大戦を境に行われなくなっていました。再び関帝誕が復興するのは一九八九年のことです。それからは、来街者の噂が噂を呼び、現在では関帝誕の日になると、祭事や舞台を見物しようとチャイナタウンに多くの人々が集まり列をつくるほどです。明らかに街に活気と賑わいをもたらしています。現在の第四代目の関帝廟は、中華街の華僑華人の和解のシンボルであるだけでなく、街の観光地化の牽引役にもなっています。

あの世とこの世の対話——清明節

さてクイズである「清明節」のお話をしたいと思います。清明節は二四節気の一つで、冬至から数えて一〇五日目にあたり、新暦の四月四日から六日頃を指します。清明節は、祖先のお墓参りをする日で、華僑華人の間では、家族が集まり家で祖先の供養をした後、中華義荘という華僑華人の共同墓地に行って墓

参りをします。

通常、家では「三牲三素（サンセンサンスウ）」といって鶏、豚バラ、魚など形が残ったままのもの、そして野菜や果物など各三種を大きなテーブルに並べて先祖に祀ります。我が家の場合、お供え物を置いた大きな円卓の周りに椅子を並べ客席をつくります。席前にそれぞれ食器や杯などを並べます。祖先の人たちが帰ってくると考えているからです。その円卓の前には、香炉が置かれ子孫はおのおの線香を上げ、一家の安泰を願います。家族がみな線香を上げ、そして祖先の食事も済んだと思えるころ、祖先をあの世へ送り返します。その際、金箔の紙を中国の昔の通貨である「元宝（ユエンパオ）」の形に折った「紙銭（ズーチエン）」を門前で燃やします。祖先があの世に行っても、お金に不自由しないようにとの思いを込めて送金するのです。

写真8　シンガポールでの先祖崇拝

写真8は、シンガポールの街頭で行われていた先祖崇拝の様子です。祖先を供養するためたくさんの食べ物や果物、そして金箔の紙銭が並べられているのが見られます。世界どこへ行っても、華僑華人の間では類似した文化が残っています。

チャイナタウンには、先祖崇拝などに使われる線香や金箔の紙銭などを取り扱っている商店があります。冥界に送る金箔の紙銭という伝統的なものだけでなく、最近では、紙幣に似せて印刷した冥界用のお札も売られています。また、冥界用のクレジットカード、携帯電話、そしてあの世とこの世の往来に使う

であろうパスポートや航空チケットなどもあります。

街に新しく伝わった伝統文化「媽祖祭」

二〇〇六年三月、横浜チャイナタウンには「媽祖廟」が新しく落成しました。設立の直接のきっかけとなったのは何だと思いますか？　観光客の要望があったからでしょうか？　それとも、媽祖を信仰する台湾や福建省の出身者が増えたからでしょうか？　それとも、建設地にワンルームマンションが建つ予定だったからでしょうか？

実は現在、媽祖廟が建てられている土地には、ワンルームマンションが建つことが決定され、二〇〇三年には建築の準備も進んでおりました。それを知った中華街のリーダーたちが、チャイナタウンの一角にワンルームマンションが立つと、街の景観、治安など各方面においてチャイナタウンの魅力を損なう問題点が多いと危惧しました。その結果、チャイナタウンの街づくりを担う横浜中華街発展会協同組合の関係者が土地の所有者であった株式会社大京と交渉を行い、用地を買収することに合意しました。

買収を行ったのですが、当初この土地をどのように利用するかということは明確に決まっていませんでした。数カ月間調査を行った結果、かつてこの土地には清国領事館があったこと、そして清国領事館のなかに媽祖が祀られていたことがわかりました。さまざまな調査と討議を経て、買収した土地に航海を守る女神である媽祖廟を設立することに決まったのです。それに伴い、二〇〇四年六月、横浜媽祖廟設立理事会が組織され、理事たちが媽祖の本山ともいえる福建省の湄洲と台湾台南の天后宮へ視察に行き、現地の人々から多くの助言をもらったそうです。

二〇〇六年の落成式の際も、中国福建省、台湾台南から多くの人々が参列し、横浜には残っていなかった媽祖信仰における参拝の作法や儀礼を横浜チャイナタウンの人々に伝授しました。それまで横浜チャイナタウンに住む人、特に若い世代の華僑華人に媽祖について聞くと、「媽祖って何？」という答えが返ってくるほどでした。きっかけはワンルームマンション建設を阻止するためではありましたが、媽祖廟ができたことによって、媽祖信仰や媽祖への理解が広まり、街には伝統文化が新たに伝わっています。これは、文化の移動、文化の再生産を考える上でとても重要な出来事といえます。媽祖廟が落成した翌年、横浜チャイナタウンには新しく「媽祖祭」というお祭りが誕生しました。

ここで特筆すべきことは、横浜チャイナタウンにおいて、伝統文化施設が観光スポット化し、また祭りが街のイベントとして機能している点です。先ほどお話ししたように関帝廟はかつて学校の構内にあり、地元の人たちがお参りに行くだけだったのが、再建に伴い通りに移転することによって来街者がみな足を止める観光スポットになりました。関帝廟の成功の経験を媽祖廟という新しい名所作りにも活用しようとする動きが見られます。

現在、両廟の運営委員、そして横浜中華街を率いる協同組合のリーダーの方たちは基本的に中華街でビジネスをしている経営者の方々が中心です。彼らは、チャイナタウンを華僑華人に閉ざされたコミュニティにするのではなく、より多くの人たちに開放された文化商業空間にすることを目指しています。伝統文化をディスプレイする際も、地元の人たちへの啓蒙、観光客へのサービス精神、経済合理性など、あらゆる面を考慮したうえで、文化を再構築している姿勢がうかがえます。

二〇〇八年三月一八日に横浜で行われていた「媽祖祭」をご紹介します。これまで横浜のチャイナタウ

写真９　祭壇に祀られる品々と招財童子

写真10　人々の頭上を通る媽祖の神輿

ンで行われてきた祭りとは一風違っており、興味深く思いました。廟の本殿で祀られている媽祖のほか、順風耳と千里眼、その他招財童子などが街に繰り出し練り歩きます。通りに並ぶ家や店頭には祭壇が設けられ、お線香のほか、果物やお菓子などが供えられていました。ある店頭の祭壇上で、特に私の目にとまったのは、花びらがちりばめてある水が入った洗面器と、口紅やほほ紅などの化粧道具、そして鏡が置いてあることでした。「これは何に使うのですか？」と聞いたところ、「媽祖さまは女神なので、練り歩きを

している途中、お化粧直しに使っていただくのです」と祭壇を用意した台湾出身の女性店主が言っていました。横浜中華街にまた一つ新しい文化が伝わってきたと、彼女の話を聞いて思いました。ちなみにその店主は、一九九〇年代に台湾から日本に移住し、横浜に中国の土産店を開業して一〇年になるとのことでした。来日以前より媽祖を信仰していたため、近年街をあげてのプロジェクトで思いがけず媽祖廟が建設されたことを非常に喜んでいました。

写真9が招財童子です。財を招く神童です。飛び跳ねながら一緒に街を練り歩いていました。祭壇がある店の門前の祀られている関帝と土地公（福徳正神）に拝礼し、店の中に入っていきました。招財童子が入ったお店は繁盛すると考えられています。そのため店に入った招財童子に店主は丁寧にお礼をしていました。

こうした神々の列の最後に、ようやく神輿に乗った媽祖が多くの人に担がれてきました。媽祖が通る際、街頭にいた人々はみな一列になってひざまづき深く叩頭しました（写真10）。頭上を媽祖の神輿が通ることによって、人々は媽祖の庇護を受け福が宿るといわれました。こうした儀礼も、チャイナタウンに媽祖祭ができたことによって、新たに横浜で行われるようになりました。初めて経験する街の人たちも、そして観光客も一緒に参加し、新しい祭りを楽しんでいました。

8　おわりに

チャイナタウンでは、人々の移動に伴い、文化がさまざまな形で融合し新しい文化が生まれています。

横浜を例に、欧米人に付随してやってきた中国系移民が日本に定着することによって誕生したチャイナタウンの歴史をご紹介させていただきました。また、一九八〇年代以降、チャイナタウンの観光地化に伴い、中国の民衆文化である春節、関帝や媽祖信仰などが観光客向けに開かれ、街のイベント＝祭りといった形で伝統文化が再生産・再構築されているのを見てきました。

一つ、とても重要なことで、誤解のないよう確認しておきたいことがあります。ここでお話ししてきたチャイナタウンのお祭りは、華僑華人だけで組織され運営されている祭りだと思われている方が多いかもしれませんが、実は実行委員は、チャイナタウンでビジネスをしている日本人や、近くで暮らしている方など、華僑華人に限らずいろいろな方が関わっています。

祭りに携わる人々のきっかけはさまざまです。ビジネス目的の人もいれば、アイデンティティが喚起された華僑華人もいます。しかし、参加者をみていると、民族的な背景に関わりなく、チャイナタウンの街の一員であるという帰属意識や日ごろのつながりから、祭りにかかわるようになった人が少なくないのがわかります。日本人だけれども獅子舞や龍舞ができる、中国の民衆文化を知っている、という人が増えています。実際、華僑学校の生徒のなかには、両親とも日本人というケースが少なくなく、彼らは獅子舞の技術を身につけ、イベントにかり出されています。

もう一点、観光地化に伴い新たに祭りが再生産されていることは触れましたが、この現象は日本のチャイナタウンに限ったことではありません。お隣の韓国にあるインチョン・チャイナタウンでも、観光客誘致のため、中国の民衆文化にちなんだ祭りが行われています。その一つとして、私が興味を持っているお祭りがあります。「ジャジャンミョン祭」です。黒い甘味噌で味付けをした麺があり、中国では「炸醤麺（ザージャンメン）」、

日本では「ジャージャー麺」と呼びますが。韓国ではこれを「ジャジャンミョン」と呼ぶそうです。手頃な値段から美味しい食べ物として韓国の多くの人に親しまれてきたジャジャンミョンの発祥地がインチョン・チャイナタウンにあるということで、近年インチョンでは「ジャジャンミョン祭」が行われるようになりました。毎年一〇月に行われており、ジャジャンミョンの早食い競争などのイベントが街に賑わいをもたらしています。

この他にもインチョン・チャイナタウンでは、中国人節が大々的に行われているそうです。しかもそれを仕掛けたのは韓国の華僑華人たちではなく、インチョン市だそうです。観光客誘致のため市が投資を行い、チャイナタウンという空間ならではの祭りを企画したのです。さまざまなところで行われている民衆文化の担い手が、必ずしもそのエスニックグループのメンバーであるとは限らなくなっています。

横浜とインチョンに見られるように、祭りと観光は密接につながっています。祭りへの参加を通し、街の人たちだけでなく、観光客も一緒に楽しんでいます。また、「春節」とは何か、どんな過ごし方をするのか、どんなものを食べるのかなど、異文化を知るきっかけになっています。そんな意味では、移民は文化の伝播者であり、チャイナタウンはその祝祭空間を提供する場です。

しかし、同じ華僑華人であっても、どこへ移住したかによって、彼らの文化は微妙に様相を変え、それぞれ独特な雰囲気をかもし出しています。日本の回転飲茶しかり、韓国のジャジャンミョン祭しかり、移民が身につけて越境した文化は、越境した先の土地の文化と融合し、またその地の人々の嗜好に合わせ、ユニークな文化へと新たに構築されるのです。

以上、本日の話から、世界のチャイナタウンの多様性、そしてその面白さが皆様に伝わっていれば、チ

ャイナタウンの一員、そしてチャイナタウンを研究する者として、とてもうれしく思います。

ご清聴ありがとうございました。

参考文献

王維　二〇〇三『素顔の中華街』洋泉社。
陳天璽　二〇〇一『華人ディアスポラ』明石書店。
陳天璽「危機を機会に変える街――チャイナタウン」『現代思想』vol.35-7、青土社、二〇〇七年六月号、八四―九四頁。
西川武臣・伊藤泉美　二〇〇二『開国日本と横浜中華街』大修館書店。
山下清海編著　二〇〇五『華人社会がわかる本』明石書店。